

歯牙腫により萌出を阻害された 左側下顎犬歯の牽引症例

○岩沼 健児

いわぬま歯科医院

【症例患者】

2016年（平成28年）8月に初診にて来院した、13歳4カ月の女性の患者で、初診時に左側下顎乳犬歯のみの晩期残存を認めたため、X線撮影を行った。その結果、左側乳犬歯根尖部に歯牙腫様像及び、さらにその下部に同犬歯が未萌出状態で存在するのを認めた。

【治療方針】

保護者の方を交え、状況を説明し歯牙腫の摘出を勧めたところ、同意したため、摘出を行うことになった。

なお、当初の説明の段階では、根未完成永久歯の場合、その後の自然萌出を期待できるとの症例が多くあったことから、摘出後そのまま自然萌出を期待する方針で治療を行うこととした。

なお、保護者と患者には、摘出術実施後一定期間が過ぎても歯牙の自然萌出が見られない場合は、牽引を行う可能性もあるという説明も同時に行った。

【治療方法】

以下の様に行った。

2016年8月30日

乳犬歯抜歯及び歯牙腫摘出術実施
術後X線撮影により確認

2016年9月から12月初旬まで

X線撮影等による経過観察

2016年12月19日

予後自然萌出が困難と判断し、保護者及び患者に開窓牽引を行う事を説明。

2016年12月24日

左下犬歯開窓術を実施
唇面レジン系接着剤でボタン接着

2017年1月6日

左側側切歯唇面及び同第一小臼歯頬面にブラケット接着、主線で結び、主線と同犬歯唇面のボタンを弾性高分子材料線で結紮、牽引開始。

2017年4月4日

ブラケットをさらに左側切歯唇面及び同第二小臼歯頬面にも追加、主線を交換し牽引継続。

2017年6月12日

左側犬歯の1/3以上の萌出を認めたため主線及びボタン除去、ブラケットは今後の矯正の可能性があるので残し、予後観察へ

現在に至る。

【考察】

歯牙腫摘出術後の歯牙の萌出に関しては、後継永久歯の根の完成状態にもよるが、自然萌出をしたとの報告と、牽引を要したとの報告が拮抗しており、歯牙腫除去術時の同時牽引に関しては、迷いがあったことは確かであり、結果として、本症例では歯牙腫除去術と開窓術と2度にわたって患者が侵襲を受けることになってしまった点に関しては、反省の余地が多い。

今後さらに判断の確度を増すと共に、反省の意味を込めて、今回の報告となった。